建築

都城市民会館

五十嵐　太郎

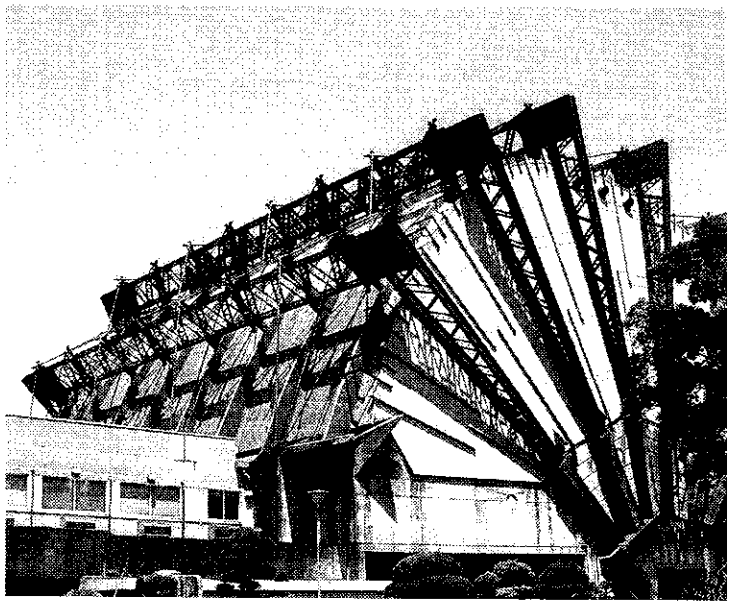
解体の危機にある先鋭的傑作

菊竹清訓の設計した宮崎県の都城市民会館（1966年）＝写真＝が、モダニズムの記録と保存にとりくむDOCOMOMOジャパンによって重要な建築として選定された。明治以降、西洋の動向を模倣していた日本の建築が、初めて世界を追い抜いた時代の貴重な傑作である。放射状に鉄骨のフレームが広がるホールを持ち上げたダイナミックなデザインは、半世紀に及ぶ菊竹の活動の軌跡においても、もっとも先鋭的な造形を展開したものだ。しかし、現在、この建築が解体の危機にある。

ところで、都城が世に送りだしたもうひとつの個性として、東国原知事が挙げられる。彼も、故郷の愛らしい怪獣のようなシルエットの市民会館をおぼえているはずだ。宮崎県をアピールするならば、世界に誇るべきランドマークを失うことを看過していいのか。

東京と地方の格差が問題視されているが、世界中でただひとつ、ここにしかない建築を破壊し、どこにでもある開発を進行すれば、オウン・ゴールに等しい行為である。しばらくは廃墟でもいい。なんとか存続すれば、将来、手を加えて、観光資産にもなりうる建築だ。筆者は疑問に思う。美しい景観を創る会のような団体が登場しても、なぜ、こうした個性的な建築を擁護しないのか、と。「醜い景観」をつぶし、無理に西洋のような街並みに改造するより先に、現存する資産を大事にすべきではないのか。ただ単純にもったいないのである。『三丁目の夕日』のCGで復元された過去の景観の映像を鑑賞して、涙を流している場合ではない。いま、目の前にある高度経済成長期のすぐれた建築が永遠に消えようとしている現実に向き合おう。

（いがらし・たろう＝建築史家、東北大准教授）



毎日新聞（夕刊）